

執筆者紹介

こばやし 守 本学商学部教授

なかむら ひさき 本研究所客員研究員

〈編集後記〉

年度当初の緊急事態宣言の頃、コロナ禍の影響で、所報が刊行できない可能性があるかもしれないと頭の片隅をよぎっていた。しかし、ふたを開けてみれば、ここまで順調に刊行でき、杞憂に終わった。これもひとえに所員の先生方の旺盛な研究意欲と、陰ながら支えていただいている社研事務室の職員や印刷業務を一手に引き受けていただいている佐藤印刷様によるところが大きい。

さて、688号はコロナ禍とかかわりのある論考を2つ掲載することができた。僭越ながら、この場を借りて、コロナ禍におけるそれぞれの論考の意義を考えてみたい。

小林論文は、プロジェクト・マネジメントを焦点化し、コミュニケーション、人的資源、ステークホルダーに関するマネジメントを複合的に分析したものである。コロナ禍においてオンラインを通じたコミュニケーションが急速に拡大した。オンラインでのコミュニケーションは、オフライン（対面）のコミュニケーションと異なる点も少なくない。これまでも、国籍、所属、専門領域などを異にするメンバーによって遂行されるプロジェクトでは、オンラインを通じたコミュニケーションがしばしば行われてきた。コロナ禍によって急遽オンライン会議システムの導入した組織体も多く、コミュニケーションについて課題を抱えているところもあるだろう。読み手をプロジェクト・マネジメントに関する専門的な知識が乏しい学部学生としたことで、平易な文章となっている。そのため、オンライン・コミュニケーションに悩んでいる多くの人々の助けになるものであろう。

中村論文は、医療分野と警備分野の遠隔操作技術の実態と今後の可能性について考察している。医療分野ではモバイル SCOT、遠隔スマート治療支援システム、オペリングなど、警備分野ではセキュリティロボットの実践例について触れている。医療過疎地域の診療環境の整備や、自然災害や感染症流行時の医療体制の確保のため、さらなる技術開発が求められている分野である。警備分野では、人手不足が深刻化する中、人間とロボットの協働によって安全な生活環境の確保がめざされている。新規規格 5G の普及にむけて国内の携帯キャリアやメーカーなどが動いているところであるが、5G は遠隔操作技術の実用化にとっても援軍となる。コロナ禍にある現在、いわゆる「エッセンシャルワーカー」として働く労働者とサービス利用者にとって、遠隔操作技術は感染リスクを軽減する上で関心が高まっている領域といえよう。

(N.S.)

2020年10月20日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

(発行者) 宮 寄 晃 臣

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
